

---

# 毎歳祭

八百万 百合

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

毎歳祭

### 【Nコード】

N1773X

### 【作者名】

八百万 百合

### 【あらすじ】

毎年行われる祭りにある変化が起きてしまった…、その鍵を握るミリとその鍵を追うマチによるハチャメチャなところに百合百合んでおくるストーリー

## ブログ前夜祭

私はミリ

ミリ・レンチャ！

夢見る15歳！

そう…

あの日が来るまでは…

～毎歳前夜祭～

カランコロン…

…カランコロン

「明日は祭りだね」

「違う

マチの誕生日会」

忘れていた…

マチの誕生日会やろうって私言ってたんだ！

「…ごめん

マチ！」

「嫌

完全に嫌われた…

どうしよう…

……！！

「…マ〜チッ！」

「冷たっ！」

何すんの！ミリ……」

ミリの手には

マチの好きなラムネが握られていた……

「…覚えてる？」

あのと飲んだラムネの味？」

「……うん！」

いつしか右手を占領していたラムネは  
マチの右手に…

そしてミリの右手を占領しているのは  
マチの左手へ……

## ブログ前夜祭（後書き）

見てくれてありがとう…  
次回も見てね！

## 半話 キャラ紹介

「私ミリ！」

ミリ・レンチャよ！」

「好きな食べ物はご飯！  
当たり前よね！」

日本人だもん！！」

「それと…身長はマチより大きいよ！  
あと体重は普通かな」

「あと胸はB・Cあたり！！  
ちっちゃいよね…」

「ミリ…大きいよ…」

あつ！ボ…ボク、マチ。

マチ・マトバだよ。」

「好きな食べ物は食パン。

ふんわりとしたあの食感…ああ……

…意識が飛んじやたよ。」

「えつと…身長はミリより少し小さいんだ…ほんとに少しだけなんだよ！！」

…体重は普通。」

「胸は気にするな。」  
ぷにゅ

「ひゃ！！…何すんの！！」

赤面しながら言う

「マチって小さいね」

にやけながらミリはマチの胸を触る

「あっ……んっ!!」

……もう」

マチはもうミリの手に遊ばれてる

「それ!!それ!!」

…ハアハアハア

マチ…可愛い……」

息づかいが荒くなるミリ

「ああん…ミリ…」

今回は…い、いつもより…激っ…しいよ…

はあはあ……はあはあ……」

マチも息づかいが荒くなる

「キス…しちゃう?」

「う…うん」

ちゅ

くちゅくちゅ

「ミリの舌…温かい…」

くちゅぬちゅ

「マチの舌だつて…温かくて…柔らかい…」

ぬちゅぬちゅくちゅぬちゅ…

舌と舌が離れるとき

半透明な液の糸が引かれた…

「気持ち…良かったよ…マチ…

ハア…ハア……」

「ボ…ボクも…気持ち…良かった…

はあ…はあ…」

ミリとマチは両想いのなのである…

キャラ紹介…終…  
ストーリー…始…



## 半話 キャラ紹介（後書き）

今回はキャラ紹介をしました  
その中に百合を入れてみました  
次回もよろしく願いします！！

1話 これはただの始まりに過ぎない (前書き)

秋の夕暮れは長し、

春の夕暮れは長し、

どちらも自分で変えられる。

# 1話 これはただの始まりに過ぎない

教室

「はあ…」

「どうしたの、ミリ？」

ため息をついたミリに優しく声をかけるマール（ミリの友達であり、親友）。

「最近、気になる子がいてさ」

廊下側に目をやるミリ

「えっ、どこどこ」

興味津々に探すマール

「…もしかして…あの子？」

「……／／／！！」

頬を赤らめるミリ

「ふっふっふ」

「？」

「こちよこちよこちよ…」

「…くっ…くっくっ！」

必死に笑いをこらえるミリだが…

「見えた！…必殺！！脇！！」

「へっくちよん！！」

「…何！？避けただと」

見事、くしゃみにより必殺脇を避けた

「…誰かが私の噂をしているな」

「ないな」

「……えっ！？」

即答だった。

1秒もない速さで返事が返ってきた。

しかも真顔で

「噂って…ミリみたいなバカを噂するバカはいないよ」

「ひどい！ーマールレひどいよ」

「はっはっは…隙あり！！」

「うっ…！」

マールレの人差し指が見事に決まった…

そう、私ミリ。

一目惚れしてしまった女の子。

これから起こることは全て現実で起こる非現実。

私は何も知らない

何も思っていない

1話 これはただの始まりに過ぎない (後書き)

だいぶ遅くなりました、  
今は自由な時間が少ないからね、  
次話も遅くなりそうです

## 2話 一日二十四時間!! (前書き)

必須

合・レズ・GLに慣れてない人は決して読まないこと!!!

(表現のみ変更しました)

〃

その気持ちはなに？

どうゆうの？

## 2話 一日二十四時間！！

くミリの朝

「……寒い」

今日、4月9日（月）だね  
もちろん学校がありますね

「…8時20分…余裕あるーと、フルート…」

学校が始まる時刻は8時30分だね  
もちろん余裕ありませんよ

カチャ

「…起きろ。」

「……………」  
パタン

お母様が起きろと言いましたが反応ありませんね  
お母様、ちよっとヒドい！！

「…違う、そこはラーメン屋だよ、こっちの木工用ボンド専門店  
でしょ」

…なにいつてるんでしょう  
寝言でしょうね

意味が分かりませんね

木工用ボンド専門店って…

「…はっ！！…夢か…危うく騙されるところだった…一つ二万円の紙（0・01?）を買ったところだった」

寝言と全く関係ねえ！！

本当にコイツで大丈夫なのか？

私は絶対騙されないぞ！

「…！？8時29分！…諦めちゃお」

コイツ諦めた

どうすんの？

帰らねえか？

帰らせてえ！

「…ぐう」

寝た！！

寝るの早い！！

本当にコイツなのか？不安になってきた…

私も

俺も…

「…行つてきまゝす」

…え。

コイツ…本物だ！

良かった…間違いない



学校

「はあはあ……はあ……やっと……ついた……」

コイツって運動神経いいのか？

……上位クラスです

ヤバいな……

ガラガラガラ

「おはようございます！……」

「あ、ミリ、遅いぞ」

ガラガラガラ……

「ごめんごめん……、眠くてさあ」

「ミリってば寝てばかりだな」

「あはははは……」

「おい！……ミリ、マール、ちょっといいかな？話があるんだ（ニコッ）」

「はい」

よし……本当にコイツだな

そうだな……アイツに監視を続けるように言わねばな……

トイトイトイ……ガチッ

マチ、マチ・マトバ、こちら 01、フィリア・キユだ、続けてミ  
リ、ミリ・レンチヤを監視しろ

「分かりました、フィリア・キユ、必ずしも鍵をとって参ります。」

期待しているぞ、マチ・マトバよ

プツン……

「はぁ…、疲れた、早く昼にならないかな」

……

「…だいたい君たちは何しに学校に来てるのかね? (ニコリ)」

「「遊びと睡眠学習です」」

「…お前らなあ、遊びも良いけど…睡眠学習はどうなんだ!」

「いいと思います」

「私もミリにさんせい」

「…もういい、席へ戻れ」

「「はい」」

くくく…今回も先生を負かしたぞ

ガラガラガラ…ピシャン!

「…はぁ」

大きくため息をつく先生であつた

く昼休みく

「ふああゝ、お昼だー！長かった…」

「ミリつてばほとんど寝てたのに」

「いやいや寝てないよゝ、睡眠学習！」  
さわやかな笑顔とともに

「ぷつ、ミリつてばゝ」

ゴソゴソッ

「はい、ティッシュ」

マーレのカバンからポケットティッシュが出てきた

「あ、ありがとー」

よだれをふくミリ

そして机の隅へ置く

「ちょっと！ちゃんとすぐにゴミ箱に捨てなさいよ！まったく…」  
ひょいと机の隅においてあつた使用済みのティッシュを貰っていく  
マチ

「／／／／」

通り過ぎて行くマチを見て、顔が赤くなるミリ

「おやおやゝ、もしかして、恋ですか？」

冗談半分にいうマーレ

「……うん…絶対そう…」

とてつもなく真面目な顔でいうミリ

「……!!マジか…、応援してるよ!!ミリ」

「あ…ありがと／＼／」

「ハハハハハ…」

軽い笑いがクラスに響く

一方、マチは…女子トイレにいた…

「ハア…ハア…ミリの…よだれ付きティッシュ…」

美化委員であるマチは、その立場を利用したのである

「ハア…ハア…何か…あそこが…熱くなってきた…」

マチはスカートを脱ぎ、上の制服を脱いで、上着と下着だけになった

「…ちょっとだけなら…いいよね？」

マチは上着を脱いだ

「ミリのよだれを…ボクの口に…」

少し生温かいミリのよだれがマチの舌に…

「生温かいよ…ミリ」

マチは舌にのった少量のミリのよだれを飲んだ

「…熱くなってきたよ…ミリ」

身体全体が火照ってきた

「…ひゃん！？…もう…ミリってば強引何だから」  
よだれ付きのティッシュをマチの乳首へもっていく

「でも…悪くないよ…気持ちい」  
今度はもう片方の乳首を左手でいじり始めた

「…あ！あそこから汁が出てきちゃった…」  
パンツにはもう滲んでいた

「もう…脱いじゃえ」  
脱いだパンツにはネバネバの半透明な汁がついていた

「え…ミリ…ソコはだめえ！…あっ…んっ」  
右手にもっていた、ミリのよだれ付きティッシュをあそこにもっていき、擦る

「ミリのよだれが…ボクのおそこに…ボク…何か…変な気分になってきたよ…ハア…ハア…」  
擦り方が激しくなる

「ミリ…ボク…もうイキそうだ…」  
少しティッシュと共に指を入れてみる

「ああ…いく！……………ああああああん！！…あんっ」あ  
そこから汁が溢れ出る、ネバネバとした半透明な汁が…

「…気持ち…良かったよ…ミリ…」  
溢れ出た半透明な汁は上着やら制服にかかっていた…

その頃…ミリたちは…

「あっ！！私、お手洗い行ってくるね、この階は美化委員が掃除してて、立ち入り禁止だから…下の階行ってくるね」

「じゃあまたあとでね、マール」  
手をふるミリたち

「……マチの、手汗だ…／＼／」  
どうしようか心の中では思っていたが、身体ではもう動いていた

ペロッ

「！！…少ししよっぱい／＼／」  
顔がすごく赤くなった  
そして火照った

「やっぱり私…恋してるんだ…」  
これまでにない感情にそう思っただった…

～夜～

「……………」。  
なにも考えれずに寝るミリであった…

「今日は良いことあった、明日も良いこと起こるといいな」  
今日起こったことを脳内再生しながら寝るマチであった…

明日、あんな事が起こるとは誰一人知らず…

ただ一人を除いては……

2話 一日二十四時間!! (後書き)

今回は長くなりました!

一日で出来てしまいました…

なので次回は投稿まで長くなるでしょう…

あと

12時か0時に投稿するときは出します  
これからは!!



### 3話 現実とは非現実には (前書き)

その現実とは…  
何回目だ？

### 3話 現実是非現実に

チュンチュン…

「…よく寝た〜、…ん!？」

窓から外を見ると漆黒が空を染めていた

「…今何時〜？」

時計が毛糸になっていた

「…だじゃれか!?!…つと、ついッッミをしちゃった…」

階段を下り、一階のリビングへ行ってみようとす

ミシッ ミシッ ミシッ

ミシミシと音がやけに響きわたる

「お母ーさ〜ん!」

「何だい? 騒がしい」

流石お母さん、即答

「お母さん、今何時？」

「7時37分36秒」

流石お母さん、名は知られていないけど、体内時計が産まれてからずっと、一寸の狂いもない

時計を見ずに今の時間を正確にいえる特技は伊達じゃなかった

「ありがとう、お母さん！…でも、なんでこんなに外、暗いの？」

ピッ

『こちらブグの時計塔に来ています、ブグの時計塔は、建築からずっと、523年も狂いがなく、世界文化遺産として登録されていますが、ご覧ください！！、時計が逆方向に回ってます！しかも歯車はなく、軸だけで支えられているということです！こんなことは有り得ません！このように世界中で有り得ない事が起きています！皆さん、なにが起こるかわかりませんので十分注意をしてください！！』  
以上、ブグからの中継でした。』

ブッン

「分かったろ、ミリ」

「このテレビも壊れてるの？」

「壊れてない、今は」

「…え、今は？」

「そう、今は」

沈黙に包まれる

「ミリ、学校は？」

「あ……忘れてた」

慌てて学校のバッグを持ってきて、教科書を詰め始めた

「ミリ、ご飯と味噌汁をおいて置くぞ」

どんぶりに入ったご飯と茶碗に入った味噌汁が机の上に置かれた

「分かった」

教科書いっぱいのバッグを両肩にかけて、ご飯と味噌汁を食べ始めた

「ああ、やっぱり米だね」

頬いっぱいにご飯を詰め込むミリ

「私は仕事に行ってくるが、ミリも学校に行けよ」

「あ、お母さん、お父さんは？」

「あ、あいつは一昨日からどこか行っただぞ」

「ふん」

続けてご飯と味噌汁を食べ始めた

「じゃあ行ってくる」

「行つてらっしゃい」

ガチャ　ガチャン

「さて、私もそろそろ学校行かないとな」

　学校周辺

ザワ…ザワザワ…ザワ…

「学校の屋上見て見ろよ」

「え…、あいつつてうちのクラスじゃね」

「あいつは何がしたいんだ、黒いマントなんか着て」

いろんな生徒の声が聞こえてくるなか、聞き覚えのある声がした

「…お、ミリ、ミリんところは大丈夫だったか？」

マーレだ

「ん、別に時計が毛糸になっていた位だよ」

「…ミリんところは大丈夫そうだな…」

悲しそうな、でも、嬉しそうな表情を浮かべる

「え…、マーレんところは大丈夫じゃなかったの？」

「うん…ちょっとね…、いつも行く道が歪んでたんだよ…」

「あ…その、大丈夫だった？マール」

「何とかね…、あ、家も歪んでたよ、私の家は何とか大丈夫だったからよかったけど」

「良かった、マールが無事で…」

「ぶつ、ミリは大袈裟だな」

ミリが真面目に言ったにも関わらず、笑ってしまったマール

「もう！酷いよマール！せっかく私が心配してるのに」

怒るミリをマールは優しく撫でる

なでなでなで

「ふにゃ…にゃあ」

気持ちよくて面白い声がでてしまうミリ

「可愛いなミリ、でも、私を心配してくれてありがとう」

「は、恥ずかしいよ／＼／」

その言葉に顔を赤らめるミリ

「あ、そういえばミリ、学校の屋上にいるのって、マチじゃない？」  
「え？…あ、本当だ」

目をこらえてみるとそこには本当にマチがいた

バザバサ…バザ…

「本当に…なつたんだな…」

屋上からマチが見上げて見ると、そこは、漆黒な空に歪んだ町々が広がっていた

「あゝあ、見窄らしい町になっちゃったあゝよ」

マチの後ろにいたサク・サレが突然そんなことを言った

「雑魚の分際でボクに許可なく喋んな！サク！！」

「あ…、申し訳ありませんマチ様、余りにも見窄らしかったのでつい…」

「だ・か・ら、喋んなと言ってんだよ！！サク！！」

「も、申し訳ありません！！」

土下座をするサク

「チツ…、こんな事になるんだったら……くそ！！」

バギヤ……ビシッ…ボコ

強く右拳を床に叩きつけると人が2、3人入るくらいの穴があいた

「この世界中の人口は何人だ？サク」

急にサクに世界中の人口を聞くマチ

「あ…えあゝあ、その…あ…」

急に聞かれたので、とりあえず土下座から通常に戻して、調べようとするサクだが…

「おーっそい！お前のような雑魚でカスでも情報収集は晩飯前だろ！！このボクを待たせるな！」

ビヤコンー！！

右足で床を叩き始めた

「ひい！！……えっと、世界中の人口は89億5842万639人…いま、89億5842万640人になりました」

異常な早さで世界中の人口を言った、さらに増えたことも言ったサク

「44億7921万320人が…、全く持って少ない…」

「え…、いきなりどうしたんスか？」

「あゝ、破壊計算だ」



「…？何スか、それ…」

首を傾げるサク

「今の地球を破壊、すなわち壊すと、どれだけ地球回復ができるかという計算だ、サク、覚えとけ！」

「でも…その計算式はどんなのですか？」

またしても首を傾げるサク

「んなもん簡単だサク、世界中の人口÷2だ」

「えつと…その半分の人間はどうなるんスか？」

またまた首を傾げるサク

「はっ？そんなもん決まってる、現実から跡形もなく消えてなくなる、そいつがいた存在さえも…」

さらに話をつづけるマチ

「ついでに説明しておくぞ、この歪みは通常と五分五分なんだ、もしこの地球が壊れたとする、すると地球はなくなる、だが歪みが逆回転をし、地球は戻る、だが歪みは五分だ、歪みが戻るさい、五分五分の五分がなくなることになり、人が五分消されるんだ、でもそのかわりに歪みは少なくなるんだ」

長々と説明をしたマチはサクを見た

「全て記憶させていただきました」

「よし、でもあと一つ方法があるんだよ……」

マチは頷き、座った

「え、教えてください!!」

土下座で頼むサクを見たマチはこう言った

「それは……鍵だ!!」

### 3話 現実とは非現実に（後書き）

だいぶ遅くなりました

次話も遅くなりそうです

それと感想お待ちしております

ではまた次話会いましょう

#### 4話 違う視点から (前書き)

そこには…

違う見方があった

#### 4話 違う視点から

「な、なにやってるんだろね／＼／」

屋上にいたマチをみて、顔が少し赤く染まった

「お、顔が赤いぞ／＼／」

ほつぺたを触りながらミリをいじくる

「も、もう／＼やめて／＼！」

「やめないよ／＼、だって笑ってるもん」

「これは笑ってないよ／＼、怒ってるんだよ／＼！！」

だが、とても怒ってるとは見えない

「あはは／＼、可愛い／＼」

何故かマーレの息が荒くなる

「…マーレ、息、荒くなってるよ？」

「…え？」

さらに顔が赤くなる

「…だって好きなんだもん…」

ボソツと言う

「…？何か言った？」

「いや…何も言っていないよ、ただ可愛くなって思って」

「マールも可愛いよ」

「／／／…は、恥ずかしいよ…」

ミリに言われると何故か顔が熱くなる

これってやっぱり「恋」？

でもミリはマチに恋してるし…私の恋は実らないだろうな…

「……………」

マールの目から知らぬまに涙が溢れ出てくる

「…ど、どうしたの！？」

マールが泣してるのにとっても心配するミリ

「…！…！どうしたんだろ、私」

制服で拭う、だが涙は止まらない

ゴソゴソ…ゴソ

「はい、ハンカチ、これで涙、拭いて」

ミリのかばんからぐしゃぐしゃのハンカチが出てきた

「あ、ありがとう」

涙をそのハンカチで拭く、すると鼻血がタラリとでてきた

「あ、鼻血…でてるよ」

「え…、どうしよう…」

鼻血が出たことにあたふたするマーレを見て、その隣でミリは言った

「そのハンカチあげるよ」

驚くべき言葉だった…、あのミリ、物を絶対あげないミリとして、この学校でとても有名なのに…、そのミリの口から「あげるよ」という言葉がでるとは…

「……………」

その驚きに口をポカーンと開けるマーレに、ミリはこう…

「だって私ら、親友だろ」

ニコリとほほえみながら言った

「親友」…か、やっぱり私らは親友どまりで、「恋人」はいかないんだ…、仕方ないよね、女の子同士だもんね、でもこの恋は突き通

すよ、例え片思いでも、例え叶わなくても、「大好き」って言いたい…

「…？どうしたの？…あ、鼻血止まってる」

いつのまにか鼻血は止まり、涙も止まった

「…！！よかった、鼻血止まって…」

「あ、そうだ！ついだからそのハンカチあげるよ」

「え…本当？本当なの？」

「あげる」と言うことに対して二度も問うと

「本当に、本当だよ」

で、答えが返ってきた、なので私は

「ありがとう」

そう、感謝の気持ちを言葉にあらわした、そして、彼女の胸を揉んだ

「ひゃん…もうっ！」

彼女は怒ってる、私は揉むのを止めた、今度は、彼女の制服の中に手をつ込み、生で胸を揉み始めた

「きゃっ…！やめてっ／＼／＼」



彼女の裏声がでてきた、その声に反応して私はさらに揉んだ

「や、やめて〜！／＼／」

「くくく…」

『やめてあげて！！』

「！！」

マールの手が止まった、見知らぬ女の声がしたからである

「誰だ！」

『私？』

マールの問いに対して、見知らぬ女の声の答えが返ってきた

「そうだ！」

「？…マ、マール、誰と話してるの？」

不自然に思ったミリがはなしかけてくる

「…ミリは…聞こえないの？幼い、幼女の声」

『私は幼女じゃない！』

すかさず否定する幼女（？）の声

「あ、そつそつ、この声」

「……何も聞こえないけど？私が聞こえるのはこのざわつきだけだ  
けど……」

首を傾げ、ミリは言う

「え……本当に？」

「うん……本当」

マーレの問いに対して真面目に答えるミリ

「マジか……」

『あゝ、言い忘れてたけど、私の声はマーレ、あんたにしか聞こえないわよ』

「……え？そんなこと出来るわけないだろ！」

ミリの胸を揉みながら笑うマーレ

『じゃあ、試しに……マーレはミリのことが大好きです……！』

大声で言った

「ちよっ……何言ってるのさ……！！／＼／」

キョロキョロと辺りを見渡し、ミリを見る

「…？どうしたの、マール、いきなり大声だして」

「あゝ、ナンデモナイヨ、ミリ」

ミリから目をそらして、何でもないと言い放った

にしても何で？私はミリが大好きって事、わかったんだ？

『ふふふゝ 心の声もまるまる聞こえてるよゝ』

「…ちよっ！！」

『あんまり声にだして言わない方がいいよゝ』

「…分かった」

と口を閉じた

『じゃあ…、心の声ではなしてごらん』

なんで心の声が聞こえるの？ってかなんで私しか聞こえないの？…

『…やっぱり来たか、その質問…、では答えてあげよう！その答えは……』

その答えは……？

『その答えは………』

さっさといえ！！少女！

『…はいはい…、それはあなたの脳に直接話しかけているからだよ』  
そんなこと出来るのか？

『何故か出来るんだよ…私は』

ってかなんで私に話しかけたんだ？

『いや、それは…あなたのことが気に入ったからだよ』

わ…私の事が気に入った…ななななな、なぜ／／／

『それは…あなたのことが好きだから…』

は…／／／わ…私にはミリしかない！少女に恋心抱かれても…好きになるわけじゃない！／／／

『それでもいい…片思いでもいい…でも！好きでいさせて！…』

しよ……しょうがないわね…／／／

『やった〜！ありがとうマーレ、そして好きだよ』

な……なんか好きって言われると照れるな／／／

『お互い様だよマーレ、それじゃあマーレの脳と契約を結ぶから少し待ってね』

あ、ああ……って契約！？

『よしっ成立、これから宜しくね、マーレ』

…しょうがないか…ああ、宜しくな、幼女

『だ、から、私は幼女じゃない！』

ならなんて呼べばいいんだよ！

『…ん、そうね、トピ・サイプリッドでいいわ』

…え、と、トピ！これから宜しくね

『うん、宜しくねマーレ、ではまた呼びたいときに呼んでね…あ  
っ、ついでに心の声で呼んでね』

…あ、ああ分かったわ

「……ふう」

「マーレどうしたの？長い間無言で」

「…それは…ミリの胸をどう揉もつか考えていたからさあ…！」

上級ドライバー並の速さのでつきでミリの胸をさらに揉み始めた

「ひゃん…／＼／」

ミリの顔が火照ってあったかくなる

「ああゝミリの胸柔らかくてあたたかい」

「も、もういい加減はなしてゝ！／＼」

「もう！しょうがないわね！！」

ようやくミリの胸から手が離された

「ふう…マールってば女の子見るとすぐ胸揉むんだから」

「だ、だってゝ、柔らかくてあたたかいんだよ！そりゃあもう、揉むしかないっしょ」

キリッとした目でミリを見つめる

「マールは素直だな」

「わ、私は素直なんかじゃない…」

「…な、そ、そんなことないよゝ、だって…む、胸に情熱がこもってるし…私なんて…」

「…もう…！そんな暗く考えちゃダメだよ！そんなんミリらしくない！…そんなミリ…好きじゃない！！」

「…え、あ、その、あ…」

思いによらぬ言葉にうまく反応できないミリ

「だ・か・ら、そんなミリは好きじゃない！！ありのままのミリが

好き！いや……だ、大好き！！ミリ！！／／／」

あまりの恥ずかしさに顔が沸騰しそうなくらい熱くなった

「……え……………」

#### 4話 違う視点から (後書き)

さて、どうなるのか!?

続きは次話で!!

お楽しみにね



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1773x/>

---

毎歳祭

2011年11月24日12時49分発行